

# 文学の役割

中村 豪

## はじめに

大学の英文学科で英米文学に入門して以来、主に英米の作品を読み研究論文を発表してきた。若い頃は質より量で、随分乱暴で荒削りの「論文」を発表したが、今思えば“*Ignorance is bliss.*”の感が強い。論文を書く時に必ず考えるのは、その論文の意義である。特に、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の場合には、汗牛充棟の文献が出ているので、オリジナリティーは含まれているのか、既に誰かが書き尽くした事柄をなぞるような内容に過ぎないのではないか、という不安が伴う。したがって、シェイクスピアの作品が対象であると、結果的には、自分はこの戯曲をこのように読んだという説明に等しく、論文の名に値しないのではないかという疑念に悩まされる。

シェイクスピア以外の作品が研究対象であればもう少し気楽に取り組めるかもしれない。もっと寛いだ姿勢で書けるのではないだろうか。特に、先行研究や参考書が乏しく、あまり注目を浴びていない作品を論ずるときには大胆な論の展開も可能になる。また、最近出版されたばかりの話題作を扱うときも、自分の意見なり解釈を自由に披露できる余地が大きい。しかし、これらいずれの場合でも、研究者はその文学研究の意義について思案するに違いない。例えば、「自分のこの研究がどのように、誰にとって役に立つのか」と論文としての価値の大小を考え、作品の新しい解釈を提示できているかを考えるのが通例であろう。

理系に比べて文系の論文はその研究の意義を明確に答えることはむずかしい。理系の論文であれば、研究成果を何らかの形で具体化、例えば実用化・製品化することにより、その価値を証明できることが多いと思うが、文系の研究では、そのような実証が不可能に近い。文学研究の特定の論文または書物が、学会や社会の驚異的なニュースになった、という話はほとんど聞いたことがない。<sup>1</sup> 人間の根本的な生き方や社会の在り方を変えるほどのインパクトを持った

文系の研究は容易に出現しないと言って良い。

芥川龍之介 (1892-1927) が短編の中で創作した「メンスラ・ゾイリ」(“*MENSURA ZOILI*”) のような、芸術価値の測定器が実在すれば、文学作品の客観的価値を測ることができ、芥川賞でも直木賞でも選考の苦勞から解放されるだろうが、文学の価値は勿論主観的に決められる性質であるため、それは不可能な注文である。

## テーマ

前置きが長くなったが、本エッセイでは、文学の役割または意義とは何かを中心に述べることにしたい。あるいは、「文学随想」と呼んでも良い。筆者の専門の関係上、イギリス文学の話題が多くなる。以下の順序で私見を開陳したい。まず、文学の種類を挙げ、それぞれの文学の役割を述べる。次に、文学研究の方法を紹介し、続いて、文学研究の意義を検討する。なお、読者としては、主に文学系の学生を想定しているが、「学苑」読者であればどなたであっても多少有益な点があるかもしれない。ただし、論文ではないため、あるいは独断と偏見も散見されると思う。

## 文学の種類

文学の種類を挙げるに当たって、文学の定義を見てみよう。例えば、岩波書店『広辞苑第六版 DVD-ROM 版』(以下、『広辞苑』と略記) は「文学」の定義として4種類の語釈を示しているが、そのうち、本エッセイに関係するものは2つめの語釈「(literature) 言語によって人間の外界2および内界2を表現する芸術作品。詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆などから成る。文芸」である。これが「文学」の最も普通概念である。ここで挙げられている「詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など」は形式面からの分類である。他に、作家が作品を執筆するときに対象とする読者の種類に着目すれば、純文学と大衆文学という分類も行われる。児童文学も読者の区分からみたジャンルである。

---

また、古典主義、ロマン主義、リアリズム、自然主義のように、描写する対象に対してどのような態度や立場で臨むのかを表す分類もある。あるいはまた、小説であれば、作品のテーマに応じて、恋愛小説、教養小説、心理小説、社会小説、私小説、家庭小説、時代〔歴史〕小説のような分類も可能である。更に、作家の創作意図によって、風刺小説、冒険小説、推理〔探偵〕小説、怪奇〔恐怖〕小説、寓話等の区分を設けることができる。このほかに、作品の長さに応じて、短編小説、中編小説、長編小説という呼称で分けたり、日本文学やアメリカ文学、フランス文学のように国別に分けたりすることがあるのは言うまでもない。

## 文学の役割

以上、文学の種類を一瞥したが、純文学と大衆文学という分類が一番単純でわかりやすいと思われるので、その分類を通して、文学の役割について考える。ただし、詩は筆者の守備範囲外にあり、児童文学は読者が限定的であるので除外する。最初に純文学について検討しよう。「純文学」と「大衆文学」は、例えば次のように定義されている。純文学:「①広義の文学に対して、美的情操に訴える文学、すなわち詩歌・戯曲・小説の類をいう。②大衆文学に対して、純粋な芸術を指向する文芸作品、殊に小説。」(『広辞苑』)、「[通俗文学・大衆文学と違って]多く売れることを期待せず、純粋に芸術的な意図の下に作られる文芸作品。」(山田忠雄〔主幹〕『新明解国語辞典第六版』三省堂、2005。以下、『新明解国語辞典』と略記)、「日本の近代文学および文壇における独特の用語。読者の娯楽的興味に媚びるのではなく、作者の純粋な芸術意識によって書かれた文学というほどの意味。大衆文学、通俗文学の対義語。しかし、1960年代の高度経済成長と大衆社会化状況の始まりの中で起きた「純文学論争」のころから、その概念が揺らぎ始めたといえる。(以下、略)」(『ブリタニカ国際大百科事典小項目版 2013』。以下、『ブリタニカ』と略記)

大衆文学:「純文学に対して、大衆性をもつ通俗的な文学。推理小説・剣豪小説・家庭小説・ユーモア小説などをいう。大衆文芸。」(『広辞苑』)、「[純文学と違って]おおぜいの読者を対象とした、興味本位の文学作品。」(『新明解国語辞典』)「大量消費を前提に創作される娯楽を主眼とした文学。作家が書きたいことを自由な立場で書いたものを純文学とす

れば、読者を喜ばせ、楽しませるために書いたものを大衆文学と呼ぶことができるが、両者の境界は必ずしも明白ではない。純文学に比べて価値が劣るという意味での大衆文学という名称は、日本で用いられるもので、外国ではこの区別はあまり行われない。読者の反応を絶えず配慮しながら筆を進めたディケンズなどは、純文学と大衆文学の一致の好例であろう。現在大衆文学の代表的なものは、世界的に推理小説やSFである。」(『ブリタニカ』)

純文学の上記の定義のうち、『広辞苑』の①はここでは当てはまらないが、それ以外の説明はほとんど納得できる。面白いのは『ブリタニカ』の説明で、純文学と大衆文学の区別は外国ではあまりないという指摘である。しかし、筆者は文学研究に際しては、分類する方が好都合であるし、分類が必要であると考えている。外国文学の作品をそのいずれとみなすかという問題は複雑で人によって意見が異なることも多いと思われるが、純文学と大衆文学の決定的な相違は、後者が読者／観客に対して娯楽を提供することを第一の目的としている点であるとすれば区別が簡単である。作家が、執筆前から作品の売れ行きに配慮し読者の機嫌取り的な方向に向かって筆を進め、芸術性を無視するような態度を取るとすれば純文学の資格はない。したがって、ドイル(Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930)のシャーロック・ホームズシリーズやクリスティ(Dame Agatha Christie, 1890-1976)の一連の作品を大衆文学の代表と見ることに意義を唱える人はまずいないと思う。勿論、ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の作品がその両者の性格を備えていることは間違いないし、ディケンズ以外の有名な作家でも大衆性・通俗性のある作品を書いている。

大衆文学は、普通、文学研究の対象にはならない。その理由として、娯楽性を重視していることに加え、往々にして以下のような欠点を免れない作品が多いからである。勧善懲悪的なストーリーである、登場人物が典型的である、作品のタイトルと背景や人物名が異なるだけで同じ作家の他の作品の焼き直し・同工異曲に過ぎない、内容に作者の思想・主張が希薄であるか欠如している、プロットの展開に不自然または無理または矛盾した面が見られる等、読者に飽きられる要素が多い。大衆文学は、何度も読みたいという欲求を生むことはまれで、読むたびに読書の醍醐味を感じさせてくれる文学ではないのである。横溝正史(1902-

81) や江戸川乱歩 (1894-1965) の作品を熟読してその魅力を研究する人は、皆無ではないかもしれないが少ないであろう。<sup>2</sup>

## 純文学の役割

純文学が文学研究の対象である。筆者の読書履歴に基づいて、ここに純文学の役割を挙げてみたい。純文学は、主要人物の言動とプロットの進展を通して、1. 人生のさまざまな局面、特に困難に遭遇した際の人間の生き方や対処法を提示したり、人間の性格と思想の多様性を描出したりする。2. 人間の特異な性格を表現する。3. 社会問題を暴露〔告発〕し、解決を迫る。4. 人間の理想的な生き方を

描く。5. 人間の性格の二面性と矛盾を指摘する。6. 人類の未来についての警鐘を鳴らす。7. 人間の愚昧さ・醜悪性を風刺・攻撃し、時に矯正策を提示する。8. 日常生活の不条理を描く。9. 笑いを引き起こすことによって読者／観客を楽しませる。10. カタルシスを生じさせることによって読者／観客の心を浄化する。

これらの各役割を果たす作品例を筆者の通読したものの中から挙げると以下ようになる。但し、これらの作品の中には、分類がむずかしく、複数の役割を果たすものも多数あるが、煩雑になるので重複して記載することは避けている。あくまで便宜的に分けたものである。左側の番号は以上の分類番号を示す。

	作家名と作品名
1	フィールドینگ (Henry Fielding, 1707-54): 『トム・ジョーンズ』 ( <i>Tom Jones</i> , 1749), シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55): 『ジェーン・エア』 ( <i>Jane Eyre</i> , 1847), サッカリー (William Makepeace Thackeray, 1811-63): 『虚栄の市』 ( <i>Vanity Fair</i> , 1847-48), クローニン (Archibald Joseph Cronin, 1896-1981): 『城砦』 ( <i>The Citadel</i> , 1937); 『青春の生きかた』 ( <i>Shannon's Way</i> , 1948), シェンキューヴィチ (Henryk Sienkiewicz, 1846-1916): 『クオ・ワディス』 ( <i>Quo Vadis?</i> , 1896), ドストエフスキー (Feodor Mikhailovich Dostoevski, 1821-81): 『カラマゾフの兄弟』 ( <i>The Brothers Karamazov</i> <sup>3</sup> , 1879-80), 菊池寛 (1888-1948): 『恩讐の彼方に』 (1919)
2	エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48): 『嵐が丘』 ( <i>Wuthering Heights</i> , 1847), ドストエフスキー: 『罪と罰』 ( <i>Crime and Punishment</i> , 1866), ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900): 『ドリアン・グレイの画像』 ( <i>The Picture of Dorian Gray</i> , 1891), モーム (William Somerset Maugham, 1874-1965): 『月と六ペンス』 ( <i>The Moon and Sixpence</i> , 1919), クローニン: 『美の十字架』 ( <i>A Thing of Beauty</i> , 1956), 夏目漱石 (1867-1916): 『こゝろ』 (1914), 芥川龍之介: 『地獄変』 (1918), 三島由紀夫 (1925-70): 『金閣寺』 (1956)
3	ディケンズ: 『オリヴァー・トウィスト』 ( <i>Oliver Twist</i> , 1839), ドライサー (Theodore Dreiser, 1871-1945): 『シスター・キャリー』 ( <i>Sister Carrie</i> , 1900); 『アメリカの悲劇』 ( <i>An American Tragedy</i> , 1925), スタインベック (John Steinbeck, 1902-68): 『怒りの葡萄』 ( <i>The Grapes of Wrath</i> , 1939), ソラ (Émile Zola, 1840-1902): 『居酒屋』 ( <i>The Drunkard</i> , 1877), ソルジェニツィン (Aleksandr Isayevich Solzhenitsyn, 1918-2008): 『ガン病棟』 ( <i>Cancer Ward</i> , 1968), 葉山嘉樹 (1894-1945): 『海に生くる人々』 (1926), 小林多喜二 (1903-33): 『蟹工船』 (1929), 石川達三 (1905-85): 『風にそよぐ葦』 (1949-51)
4	オースティン (Jane Austen, 1775-1817): 『自負と偏見』 ( <i>Pride and Prejudice</i> , 1813), 夏目漱石: 『虞美人草』 (1907), 武者小路実篤 (1885-1976): 『友情』 (1919)
5	スティーブンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94): 『ジキル博士とハイド氏』 ( <i>Dr Jekyll and Mr Hyde</i> , 1886), 国木田独歩 (1871-1908): 『正直者』 (1903)
6	ハクスリー (Aldous Huxley, 1894-1963): 『すばらしい新世界』 ( <i>Brave New World</i> , 1932)
7	スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745): 『ガリヴァー旅行記』 ( <i>Gulliver's Travels</i> , 1726), トゥエイン (Mark Twain, 1835-1910): 『不思議な少年』 ( <i>The Mysterious Stranger</i> , 1916)
8	カフカ (Franz Kafka, 1883-1924): 『変身』 ( <i>The Metamorphosis</i> , 1915)
9	シェイクスピアの主要な喜劇: 『夏の夜の夢』 ( <i>A Midsummer Night's Dream</i> ), 『ヴェニスの商人』 ( <i>The Merchant of Venice</i> ), 『お気に召すまま』 ( <i>As You Like It</i> ), 『十二夜』 ( <i>Twelfth Night</i> ), 『テンペスト』 ( <i>The Tempest</i> )
10	シェイクスピアの主要な悲劇: 『ロミオとジュリエット』 ( <i>Romeo and Juliet</i> ), 『ハムレット』 ( <i>Hamlet</i> ), 『オセロー』 ( <i>Othello</i> ), 『マクベス』 ( <i>Macbeth</i> ), 『リア王』 ( <i>King Lear</i> ), 『コリオレイナス』 ( <i>Coriolanus</i> )

---

上記のリストにある作品の多くは文学研究の立派な対象になるであろう。なお、上の表に記載しなかったが、是非一読を勧めたい作品を挙げてみよう。これらは筆者が寝食を忘れて読みふけた小説である。

ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832): 『若きウェルテルの悩み』 (*The Sorrows of Young Werther*, 1774)

スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832): 『アイヴァンホー』 (*Ivanhoe*, 1820)

ユゴー (Victor-Marie Hugo, 1802-85): 『氷島奇談』 (*Hans of Iceland*, 1823)

ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928): 『ダーバービル家のテス』 (*Tess of the D'Urbervilles*, 1891)

サリンジャー (Jerome David Salinger, 1919-2010): 『ライ麦畑でつかまえて』 (*The Catcher in the Rye*, 1951)

夏目漱石: 『坊っちゃん』 (1906)

## 有益な文学

次に、読者に対する影響または効用の面からみると、次のような文学が有益であると思われる。第一に、読者に建設的に積極的に生きようとする意欲を与える文学である。作品を読了したときに、人生に絶望するような文学は価値が低いと判断される。したがって、例えば、太宰治の『人間失格』は文学失格としたい。これは人生に対しての敗北宣言の書、人間を辞めたいという小説とみなすことができる。但し、反面教師的な作品として読むのならあるいは無価値ではないかもしれない。偉大な作品は、読者を慰め励し、苦境を切り抜けるための回答またはヒントを提供する。『トム・ジョーンズ』や『虚栄の市』、『城砦』等はそのような大作である。第二に、読者に対して、人間についての興味を喚起する力を持つ文学は読む価値が高い。シェイクスピアの戯曲が世界的に人気があるのは、鑑賞することによって、人間の多様性を知り、人間についての関心を深めることができるからである。シェイクスピアも翻訳している中野好夫 (1903-85) は、「どうも私の興味は年来人間にある。もし人に自然型、人間型とでもいうような型の分類が成り立つものであるとすれば、さしずめ私などは文句なしに人間型らしい」<sup>4</sup>と書いている。この引用中の「自然型」とは自然 (の事物・現象) に興味を抱くタイプを指し、「人間型」の方は人間を興味の対象とするという意味

である。同じく中野好夫は、「とにかく四十年間はシェイクスピアに親しみ、現にいまも暇があれば彼の作品を反読<sup>〔マア〕</sup>して感慨にふけるのが、一番に楽しい」<sup>5</sup>と述べているが、これはシェイクスピアの戯曲の中に、実人生のほとんどすべての性格が見られるからであると言えよう。コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) が『文学評伝』 (*Biographia Literaria*, 1817) の中で、シェイクスピアを “our myriad-minded Shakespeare” と呼んだのは同じ意味であろう。一人の人間が一生のうちに出会い交際できる相手の数は限られているが、文学作品を読むことによって、仮想の世界でさまざまな人物を知ることができ、人間性についての理解を深めることができる。これは、文学の名作を鑑賞することによって得られる貴重な体験であり財産である。しかも、現代は電子テキストで読むことができる。古典であれば費用はかからない。IT 発展の利点を是非活用したい。

第三に、「地の塩 (the salt of the earth)」または「世の光 (the light of the world)」を志向する効果を読者に及ぼすなら偉大な文学と言えよう。これらはともに新約聖書に見える言葉である。<sup>6</sup> その意味は辞書には次のように出ている。「地の塩」: 「(新約聖書のマタイ福音書第5章による) 広く社会の腐敗を防ぐのに役立つ者を塩にたとえていう語」 (『広辞苑』), 「[キリストの教えで] 塩が食物の腐るのを防ぐように、この世の不正や腐敗を見逃すことの出来ない健全な人びとをたとえて言う語。」 (『新明解国語辞典』); the salt of the earth: “a person of great kindness, reliability, or honesty. [with biblical allusion to Matt 5:13.]” (*Concise Oxford English Dictionary 11th edition revised, on CD-ROM Version 2.0*, 以下 COED と略記), 「(世の腐敗を防ぐ) 地の塩, 世の師表, (社会の) 健全な人 (々)」 (『新英和大辞典第6版』研究社, 2002) この定義を見ると COED や研究社の大辞典の方が意味が広いと言える。「世の光」は上記のような国語辞典にも英和辞典にもまだ見当たらないが、英語の “light” を見ると “One who is eminent or conspicuous for virtue, intellect, or other excellence; a luminary.” (*Oxford English Dictionary Second edition on CD-ROM Version 4.0*) という説明があるのでこれを「世の光」の意味として良い。文学作品の中には、地の塩や世の光に相当する人物が多数登場する。



例えば、『虚栄の市』のドビン (William Dobbin) は努力の末、凡人から徐々に他の模範へと成長する。自分の幸福よりも他者の幸福を優先する生き方を貫く。私利私欲や功名心、出世欲等は彼には無縁である。地の塩である。ドビンについては別の機会に述べたことがあるので本稿ではこれ以上触れないことにしたい。そこで、これらの名前で呼ぶにふさわしい人物を他に二人紹介したい。

一人目は、英国作家ギッシング (George Gissing, 1857-1903) 作の短編小説「地の塩」(“The Salt of the Earth”, 1906) の主人公トーマス・バード (Thomas Bird) である。彼は文字どおり「地の塩」である。一流の商社に勤めるバードは、独身で年齢は 30~40 歳。両親は死んでしまい、親戚は四散している。収入は悪い方ではないようである。贅沢とは無縁の質素な下宿暮らしをしているから貯蓄ができるはずであるが、その余裕はない。それは、地の塩として、困窮している人や「慈善家」を援助してばかりいるからである。例えば、子供時代からの知り合いの一家に用途が曖昧な資金を快く融通している。その合計は 30 ポンドほどに達している。相手はその借金を返済する様子は全く見えない。また、慈善に熱心なある夫人にも安易に喜捨をする。また、自分の下宿先の家の息子には仕事を世話する。この下宿住まいを始めたのは、下宿人が見つからず困窮の危機に晒されているという事情に同情したからだったので、下宿自体が慈善行為に等しい。更に、酒好きのだらしない友人の家族には、無償で労働と金子を提供する。

このように、バードは清貧の生活に甘んじ、奉仕の精神によって自分の暮らしの向上よりも他人の幸福を優先しつつ、彼を頼りにする、困っている人々を助けることに生き甲斐を見いだしているようにさえ見える。バードについては、既述の、COED の “the salt of the earth” の定義が最もふさわしい。なぜなら、kindness も reliability も honesty もすべて彼の特質を表すからである。しかも、彼に借金や援助を求める人物の中には、彼の自己犠牲的精神に乗じてその善意を食い物にしようとする者もある。バードはその辺の消息にうすうす気づいている節があるが、これは彼の美点に数えても良いと思う。しかし、他方で、彼はあまりにも好人物過ぎるのではないかと感じてそれを性格の弱点と解釈することもできるだろう。けれども、バードのような人物が社会には必要であるし、実在するに違

ない。ギッシングは、この短編小説の最後で、“He [Thomas Bird] blamed himself often enough for this or that, knowing not that such as he are the salt of the earth.”<sup>7</sup> と書いている。バードのような人物を理想のタイプと考えてこの作品を残したとすることができる。

他の一人は、『城砦』の主人公マンスン (Andrew Manson) である。この長編小説は最近わが国ではあまり読まれていない<sup>8</sup> ようであるので、簡単に説明を加えよう。作者のクローニンはスコットランドの作家で、医師としてスタートしたが体調を崩したので作家に転じ多数の作品を発表、特に『城砦』が有名である。この作家にはモームとの類似点がある。医師として社会へ出た点が同じであるし、作品では、例えば、先に示した表の中に挙げた『月と六ペンス』と『美の十字架』はテーマ (芸術と月並みな人生のどちらが価値が高いかという問題) が共通している。クローニンがモームと比較されることについては、中村能三 (『城砦』新潮文庫の訳者) も指摘している。中村は、「モームを本格的な作家、クローニンを大衆的な作家といいならわず傾向があるのは、単にモームがシニカルであり、クローニンが素朴であるという意味ばかりでなく、モームのなかにあるなにか鐵壁のようなものが、クローニンには不足しているせいではないかと思われる」<sup>9</sup> と述べている。『城砦』は「医師としての純粋な立場と、世俗的な成功との板ばさみになって悩みながらも、真理の探求に情熱を傾けて自分の道を切り開いていく青年医師の魂の成長を描いたクローニンの代表作で、英国医学会の諸問題もとり入れてあり、医師としての体験にもとづく自伝的要素の濃い作品」<sup>10</sup> である。マンスンは、最初は正義感旺盛で患者の幸福を優先し、医師としての責務を遂行することに専念する。一本気で直情径行的な傾向もある。医師を続けながら猛勉強に励み、M. R. C. P. (Member of the Royal College of Physicians 王立内科学医師協会会員) の資格を取得する。貧しいながらも妻と協力し合って幸福な生活を送る。しかし、後に、経済的繁栄を重視するようになり打算的な治療も平気で行う俗物に変わる。良心を失いそうな危機に直面しながらその自覚がない。そのため、妻との関係が悪化し精神的な絆を喪失する。遂には、自分の過失が原因で重大で深刻な過ちを犯す。この出来事によってようやく自分の愚かさを悟ったマンスンは、元の善良な性格を取り戻し、医学界の不正や不合理

---

を正すための活動を始めようとする。けれども、その矢先にまたしても大きな打撃に襲われる。しかも、彼が関わった治療について告発され裁判沙汰になる。医師の資格を剥奪されそうな危機に晒される。形勢はきわめて不利と予想されたが、彼の真摯な雄弁によって勝訴する。マンソンはこの二つの厳しい試練を克服して再出発する。<sup>11</sup>

このように、マンソンは途中で不良医師に墮すという失敗を経験したが、自分の非に気づくことができる。強力な友情で結ばれる仲間恵まれる。彼はその試行錯誤も含む生き様のおかげで読者に忘れがたい印象を刻み込む人物である。人生で何がもっとも大事な価値を持っているのかをアピールする。すべての人物同様、欠点はあるがそれを打ち消してあまりあるほどの美点を発揮する。この作品は、日本でもっと多くの読者を獲得する資格が十分あると信じられるが、不思議なことに翻訳は絶版になっている。この作品は万人の必読書として良いと言える。ついですが、筆者は昔はモームの作品を愛読したが、時が経つにつれてその作品から遠ざかるようになった。現在は、クローニンを選ぶ。その理由を詳しく述べる余裕はないが、一つだけ挙げるなら、モームの物語には世をすねた人が書いたと思わせるようなものが見えるからである。そして彼は晩年になると世をすねた不良老人になったようである。「孤独地獄」「老人地獄」の状態に陥って苦しんだようである。<sup>12</sup>

第四に、読者を動かして社会問題を解決させるような影響力を持つ社会小説は有益である。例えば、ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』である。これは、主人公の孤児オリヴァーが苛酷な経験を重ね、悪党一味の仲間として善人悪人両者と出会いながら幸福を獲得するまでのプロセスを描いた物語である。余儀なく盗賊団の中にありながら悪に染まらない主人公が上手に書かれていると思う。オリヴァーが救貧院で粥のお代わりを所望したため、恐るべき子供と判断されて追い出されるというエピソードは有名である。この作品で描かれている、孤児のような社会的弱者たちが置かれていた悲惨な状況は読者と世間の同情を呼び起こし、「社会改良の熱烈な主張をユーモアをまじえてうったえた『オリバー・トウィスト』は、多くの人々の共感をよび、養育院〔救貧院〕改革の大きなきっかけとなった。』<sup>13</sup> また、『城砦』も、医療制度の問題を暴き、医師のモラルを問うことになったという点では社会小説と呼ぶことがで

きる。既に上述の表から想像できるとおり、『海に生きる人々』も『蟹工船』も、厳しい労働条件の下で働く人々の苦しみや葛藤を活写しているので社会小説であり、世の中に及ぼした影響は甚大である。

## 偉大な文学の条件

以上、文学の影響力または効用という観点から、4種類の文学を列挙したが、最後に、偉大な文学の共通の条件について考えてみたい。モームは小説とは何かについて書かれた本の中で、「最後に、小説は楽しくなければならぬ (Finally, a novel should be entertaining.)」と述べて、これを小説のもっとも大切な特質として規定している。<sup>14</sup> そして、「読者に与える楽しみが知的な (intelligent) ものであればあるほど、それだけその作品はすぐれていることになる」と書いている。<sup>15</sup> さらにその後でモームは、「楽しみは、『トリストラム・シャンディ』<sup>16</sup> や『カンディッド』<sup>17</sup> からと同様、『嵐が丘』や『カラマゾフの兄弟』からも得られるのである」と続けている。<sup>18</sup> この意見は妥当な見解でありほぼ首肯できるが、ただ知的な楽しみについては強調しすぎてはいけないのではないだろうか。なぜなら、文学は理性よりも感情に訴えることにその本領があると思われるからである。なお、モームが「楽しみ (entertainment)」と言うときには、その言葉から一般に連想されるような愉快な感情ばかりではなく、もっと広い意味の喜びをも意味していると解釈できるだろう。モームの言う “entertainment” は “interest” に言い換えて良いと思う。ある辞典は “entertaining” を “amusing and interesting” と説明しているが<sup>19</sup>、モームの “entertaining” はこの意味でとるべきである。

## 作品と作家との関係

次に、作品の価値とその著者との関係について触れておきたい。読者は、自分の愛読する作品の著者について、その人物も立派であり生涯も模範的であったのではないかと想像してその伝記的側面を調べたいという自然の欲求を感じると思う。モームは、作品鑑賞の上では、作者について知っている方が良く次のように述べている。

・・・ある作家が果してどのような人物であったかを知っていたほうが、その作家の作品を一層よく理解し

---

味わうことができると、私は考えるからである。フローベールについてある程度知っておれば、そうでなければ『ボヴァリー夫人』を読んでも困惑を覚えるよりはかはない多くのことも納得が行くであろうし、エミリー・ブロンテについてはわずかなことしか分っていないが、そのわずかなことでも知っていたほうが、彼女の風変りな驚くべき作品<sup>20</sup>を読んで受ける感動は、一層激しいものがあるだろう。<sup>21</sup>

しかし、筆者は、作品の価値は作者の人生とは無関係であり、作品は作者と切り離して評価すべきであるとする立場に賛成である。例えば、大塚高信はシェイクスピアとその作品との関係について以下のように書いているが、このような見方が妥当であると考える。

「それ〔シェイクスピアの作品〕を作った人が誰でもあろうと、とにかく 37 篇の劇と数篇の詩という優れた文学作品が、そこに厳として存在している。われわれはそれを読み、それを鑑賞し、それを研究して Shakespeare という人物をむしろ逆造すればよい。いつどこでどんなことをしたかということは、作品と直接関係はない。たとえ舞台の上で馬の脚をやっていた人の書いたものであっても、それは *Hamlet* 劇の偉大さに何のかかわりもないのである。<sup>22</sup>

重要な作家の中には、模範的な人生を送った人よりも、むしろ社会規範から外れるような人物が少なくないと思われるが、そのような作家の場合は特に生涯を知ることが作品鑑賞の障害になることがあると言えよう。生涯を知ったがために、作品の本来の価値を過小評価したりその作品を毛嫌いしたりするという心理が働くと思う。しかし、ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) が決闘の相手を殺して投獄されたことと彼の傑作の美点とは無関係であろうし、ワイルドが男色事件の罪で 2 年間ほど服役したことと「幸福な王子 (“The Happy Prince”)」の価値は無関係と判断して良いであろう。

## 文学研究の方法

最後に、文学研究の意義を考えたい。但し、その前に文学研究の方法について簡単に述べることにする。そうすることが、文学を愛好し文学研究を志す学生諸君にとって参

考になるのではと思われるからである。文学研究は、具体的には作家または作品研究である。作家研究は、作品数が多いときには多大な時間と労力および知的作業が必要となるので、短期間での完成は不可能である。そこで、ここでは作品研究の中の小説と戯曲の場合を考察する。作品研究の方法も多様である。例えば、シェイクスピアの戯曲が対象であれば、1. 性格論、2. 作品が書かれた時代の政治・経済・社会・宗教等の消息を視野に入れた歴史的研究、3. イメージ (imagery) または比喩表現の種類と機能の研究、4. シンボリズムの研究、5. 文法的・語法的研究、6. 文体の研究、7. シェイクスピアの作品をその材源 (sources) と比較照合して共通点と相違点を洗い出し、それぞれの作品の特徴を明らかにしたり材源の利用法とその効果を調べたりする研究、8. 本文研究、9. シェイクスピア劇と翻案・改作の比較等、幾つか挙げることができる。<sup>23</sup>

小説が対象であれば、以上の 1 から 6 までに加えて、作品に反映している作者の思想、社会問題に対する意識や抗議、特定のテーマについてのメッセージ等の抽出という研究方法が考えられる。

以上は、戯曲であれ小説であれ、文学作品そのものの研究方法であるが、作品を例えば文化的資料として研究する場合はまた別のアプローチが可能である。例えば、ヴィクトリア朝の作品に見られる当時の文化や社会的背景等を研究する方法である。

## 文学研究の意義

このように、作品の研究方法は多岐に亘るが、いずれの場合でもほぼ共通の重要な意義を持たなければならない。それは、研究者のみならず一般読者に対しても、作品の新しい読み方・解釈を提示すること、不明であった語句や文の意味を明らかにすること、その作品を読むことによって得られる魅力を再発見することである。物語の面白さを発掘することでも良いし、文体の特徴を解説することでもかまわない、人物描写の巧妙さを指摘することにも価値がある、作品に隠された作者の真意を説明することでも喜びを提供できる。研究論文の対象として選ぶのは、研究者が、より多くの読者に読書の楽しみを共有してほしいと望む作品に違いないから、その研究によって他の研究を誘発したり新しい読者を獲得できたりするならその研究の意義は大

きいと言えよう。

中野好夫は、「わたしといえども、ときに少壮英文学徒諸君の学界論文を読まぬわけではない。そして、その感想を一言にしているならば、まことに精緻で、こまかく問題を掘り下げているところなど、わたしなど、よくぞ早く自己失格を表明したものだと、思わず顎筋を撫でたくなるほどである」と感心してから、「問題の片隅をほじくる精緻も結構、大いに興っていいのであるが、たまには多少の腰だめでもいいから、体当たりとでもいうか、研究者自身の魂の要求との間に、火花を散らすような英文学論もあっていいのではないかと「オイボレの不満」<sup>24</sup>を述べている。全く同感である。自分の研究成果を是が非でも伝えたい、研究対象の作品の面白さを共有したいという熱意のある論文がどれほどあるだろうか。研究組上に作品を置いて全方向から観察・分析・記録しても自分で対象を味わってはいない論文であればどれほどの意義があるだろうか。

#### 注

- 1 ただし、ヤン・コット (Jan Kott, 1914-2001) の『シェイクスピアはわれらの同時代人』(Shakespeare Our Contemporary, 初版 1962 年, 英語版 1964 年, 邦訳 1968 年) は非常に話題になった著作である。
- 2 資料として読む場合は事情は異なる。本エッセイ 30 頁右段参照。
- 3 英語圏以外の作家の作品の英訳は *Encyclopædia Britannica 2013 Ultimate Edition* による。
- 4 中野好夫『人間うらおもて』ちくま文庫 (1994) p. 7。
- 5 中野好夫『シェイクスピアの面白さ』新潮社 (1971) p. 230。
- 6 「世の光」の方は「ヨハネによる福音書」にも出ている。
- 7 インターネットの電子図書館 Project Gutenberg に The House of Cobwebs and Other Stories by George Gissing (<http://www.gutenberg.org/cache/epub/11603/pg11603.txt>) というタイトルで提供されている e-text を引用した。
- 8 クローニンの作品はかつて三笠書房から 20 冊の全集が出版された。他に、文庫でも何点か邦訳が出された。例えば、新潮文庫に『城砦』、集英社文庫に『スペインの庭師』(The Spanish Gardener, 1950) 『地の果てまで』(Beyond this Place, 1953) 『恐怖からの逃走』(Escape from Fear, 1954) もある。
- 9 クローニン著、中村能三訳『城砦』下巻、新潮文庫 (1955 発行, 1994 三十刷) p. 301。
- 10 野町二・荒井良雄編、広川治・逢見明久増補『イギリス文学案内』朝日出版社 (2002) p. 313。

- 11 この作品のあらすじは詳しく述べることは控えた。あらすじを知ると作品鑑賞の上で、先入観が生じて不都合と考えるからである。
- 12 中野好夫『英文学夜ばなし』新潮社 (1971 年初版, 1974 年二刷) pp. 246-7。「孤独地獄」「老人地獄」はともに中野の用語。
- 13 Microsoft(R) Encarta(R) 2006. (C) 1993 - 2005 Microsoft Corporation. All rights reserved. 引用部のカッコ内は筆者の補足。
- 14 モーム著、西川正身訳『世界の十大小説 (上)』岩波文庫 (1997) p. 34。
- 15 同上。
- 16 「イギリス十八世紀の作家スターンの小説、一七六〇-七七年出版」という訳注がついている。スターンは Laurence Sterne (1713-68) で、『トリストラム・シャンディ』は *Tristram Shandy*。
- 17 「フランスの思想家ヴォルテールの小説。一七五九年出版」という訳注がついている。「ヴォルテール」は Voltaire (1694-1778) である。
- 18 モーム前掲書 p. 34。
- 19 LONGMAN Dictionary of Contemporary English Fifth edition. Pearson Education Limited, 2009。
- 20 モーム前掲書 p. 44。「『嵐が丘』のこと」という訳注がついている。
- 21 モーム前掲書 p. 44。
- 22 大塚高信注釈, JULIUS CAESAR, 研究社小英文叢書 (1969) pp. ix-x。
- 23 これらの研究方法については、デイヴィッド M. バージェロン著、北川重男訳『最近のシェイクスピア研究—参考文献へのアプローチ—』三修社 (1984) の中の項目 (さまざまな批評方法) に教えられた点がある。
- 24 中野好夫『英文学夜ばなし』p. 11, p. 13。

(なかむら たけし 英語コミュニケーション学科)